

---

**魔砲少女リリカルなのは** Gear of Night

天宮

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔砲少女リリカルなのは Gear of Night

### 【Nコード】

N7077X

### 【作者名】

天宮

### 【あらすじ】

八神はやての隣人で幼なじみ紅竜<sup>くじゅうりゅう</sup>刀夜<sup>や</sup>の物語。全く普通ではないこの少年がいかにか《運命》に立ち向かっていくのか？

魔法少女リリカルなのはとFateのクロスオーバーです。オリ主、転生者、最強もの、原作ブレイク、キャラ崩壊、ご都合主義、独自設定、ガールズラブ、テンプレ、ハーレムなどの要素を含みます。また、他作品の影響を多分に受けていますので、苦手な方、気に入

らない方はご遠慮くださいませ。

この作品は自分の処女作となりますので見苦しい点多々ござい  
ますでしょうが生暖かく見守ってくださいることをお願いいたします。

あと、関西弁が間違っている可能性が高いので先に謝罪いたします

## プロローグ - 大切な夢

夢を見た

はかない夢を

大切な人、たった一人の家族を失い、大切な人に気付いた時の夢。

母が死んだ。強くて凜として優しくかった唯一の肉親が……

電話を捨てて、玄関から飛び出した……

公園には人気がない。後で聞いた話だと、そのころ外人の渋いオッサンの不審者が出没していたらしい。

ああ、僕は一人になったんだ。その景色を見て、俺はそう思った。そう思ってしまうと、涙があふれ、泣き出してしまった。

「刀夜くん、どないしたん？泣き出してしもうて。」

優しい声が聞こえてきた。振り向くと車いすの少女、八神はやてがすぐ近くにいた。

「母さんが死んだんだ、僕ももうひとりぼっちなんだ。」

皮肉にも、彼女の両親も先月なくなっていた。それをわかっていても僕は言っていた、言ってしまった。

はやては泣きそうになりながら

「刀夜君もひとりやあらへん。うちがいるやないか。刀夜君はうちの居場所でもあるんやろ？」

そういつて手を広げ微笑みかけた。

ああ、俺はひとりじゃないんだ。

そう思いながら、はやての胸に飛び込み、母との別離の悲しみの涙を流した。

五歳の時の大切な記憶。その一週間後が誕生日であった。

その時から、俺ははやてとともに生きていくことを決意した。

## オリキャラ設定(前書き)

ネタバレなどを含むためお気をつけください。

## オリキャラ設定

紅竜 刀夜                      くりゅうとつや

C V 杉田智和

魔力ランク B

無印時 1 2 4

顔は二枚目半。体格は頼りがいがあるががちりはしていない、黒髪を荒く切っている。

八神家の隣に住んでいる。母は六歳の時に聖杯戦争に巻き込まれて戦死。普通の公立校に通っている。

変態という名の紳士。やることはちゃっかりやる。即断即決の怠け者。自分の正義に従う。はやてを深く愛している（恋愛ではなく親愛）。銀さんにかなり近い。

攻防ともに高い格闘性能を持つが、射撃や砲撃は苦手。砲撃は魔力を集めた剣をたたき込むという無茶技で代用し、射撃はアクセルシューターのみ。剣技に関しては高い才能を誇り、魔法なしならシグナムより強い。

スキル

解析魔術                      A

道具や物体、魔術を解析する技能。

魔術                              C

基本的な魔術（解析、再生、ルーン）などができる。

魔力放出

魔力を噴射して出力の足しにする技法。魔力量により威力が変わる

使用デバイス

デイルロス

テイルズオブディステニーのソーディアンの外見と能力。

アリシアの父親が前の持ち主。

## オリキャラ設定（後書き）

話が進むにつれていろいろ追加させていただきます

**第一話 無印開始（前書き）**

ジエムシードーつ目封印までです。  
キャラクター崩壊開始です。

ヒロインははやての予定です。

## 第一話 無印開始

- 懐かしい夢を見たな…

朝の日差しの中目を覚ます。時刻は6時過ぎ。

もうはやては起きてるかな？そう思い、ベットから起き上がり、リビングへ向かう。因みに、俺は八神家で生活している。二人とも親もいないし、一人暮らしもなんだから一緒に暮らしている。自宅は地下の工房ぐらいいしか使ってないし。

朝食を作っているはやてに声をかける。

「はやて、おはよう。」

「おはようさん。」

豆狸が挨拶を返す。

「豆狸言うな。」

「おい、なぜ平然と心を読む？」

「気にしたらあかん。というよりなあ、刀夜の考えてることやったらあらかたわかんぞ。」 はにかむようにはやては笑った。

「お前は俺のオカンか！？」

俺は顔を赤くしてはやての言葉に返す。はい、ツンデレとか言わない。まだ8歳ですから。

そして、二人で笑い出す。そんな朝の日常。

はやての作った朝食ができ二人で食卓をかこむ。因みに俺は料理は出来ない。食材の目利きは多少できるけど。

「そっぴいえはなあ。昨日変な夢みたんよ。なんか水橋ボイスで助けてっつて。」 「水橋ボイスって…」

はやてと俺はオタだ。まあ、細かいことは気にしないで。

「昨日か、なんか俺もそんな念話聞いたけど。」

「念話かあ。魔術関係者やるうか？」

「いや、魔導関係者だろ。不特定多数に対して助けを求めるなんて、魔術師はまずしないし。」

会話を交わす。因みに俺は魔導師でもあり魔術師でもある。まあ、どっちも半人前だがな。はやての治療に役立てばいいとおもい、魔術関係者に会わせたりしてるから、魔術も魔導もはやては知っている。

「魔術師だったら、畏の可能性が高いからな。ここは静観が正解だ。一応、オッサンにも報告しといたし。」

俺ははやてに告げた。ちなみにオッサンは俺の身元引受人かつ上司である。本名は確か月見総司だったか？二枚目のチャライやつだ。

「まあ、この件に関しては静観と言ったところか。」

結論づけて、食事を続ける。

「しかし、はやてもまた料理の腕あげたな。うまいよ」

煮物もしっかり味がしみてるし、味噌汁のだしの風味も生きてる。

「ありがとう。」

「俺の方こそ、いつもおいしい飯ありがとう。」  
お互いに感謝のことばを交わす。

そして他愛もない会話を交わした。

「ごちそうさま。んじゃ、学校行ってくる。今日は恭也さんとこ行ってから帰ってくるから、6時過ぎになると思う。」

「了解や。晩ご飯何か食べたいものある？」

「ふうむ……カツ丼」

「いいで」

「んじゃ、行ってくる。知らないやつや、知ってるオッサンについて行くなよ。」

そういい残して、俺は出発した。

「美由紀は少し離れてくれないか。」

恭也さんが美由紀さんに告げた。これから仕上げというところ

だ。

「シャルティエ」「ディムロス」「セットアップ」

俺と恭也さんが互いにアームドデバイスを構えた。俺がディムロス、恭也さんがシャルティエとタガーである。

恭也さんが距離を詰めてくる。俺は上段からそれを迎え撃つが、いかんせん小3と大1、その年齢差からくる体格差から弾き飛ばされる。そのまま距離をとり、

「轟魔人剣」

ディムロスから魔力波をとばす。約三メートルほどしか間合いはないが少しの牽制にはなる。ディムロスを下段に構え直し反撃に備える。

「そこだ！」

横から突進してくる恭也さんに

「虎牙……」

シャルティエをはじき上げ「破斬！」

上段を返すが

「甘いぞ」

左のタガーの一撃を腹に受け、二メートル程後方に飛ばされ着地、そして追撃。ディムロスをタガーに抑えられ、逆手に持ったシャルティエを喉元に突きつけられる。

「勝負あり！」

美由紀さんの声が響く。

「ふう、」

恭也さんが一息つき、剣を下げた。俺も一息ついてディムロスをしまった。

「やっぱり体重が足りないな。」

体重40キロないしな……つぶやいたら、なんか美由紀さんに睨まれた。なんか変なこと言ったかな？恭也さんは苦笑いしてたし。

「そういうのは女性の前では禁句だよ。」

そういつて、頭を軽くなでてきた。優しいお兄さんな雰囲気だ。

かなりのイケメンだし、噂によるとかなりもてるらしい。

「それはそうと、昨日おかしな念話がきたんだが」

「あの『助けてください』か？とりあえず静観することにしたが」

恭也さんも静観を選ぶか……まあ、忍さんの件で魔術と魔法を知ってるからな、理由は同じどころだろう。

「それにしても、詠唱なしで試合はきつくはないか？」 恭也さ

んは訪ねてきたが

『……ファイアーボールぐらいしか使えんのでな。刀夜は剣技に特化しているからな。ショートカットでシャドーエッジやネガティブゲートを使える恭也には勝てんよ。』

俺のアームデバイスである。ソーディアン・ディムロスが答えた。

ソーディアンというのはデバイスのシリーズ名だ。通常のアームデバイスとちがいで人格が投影されてをり、使用者の先天資質に関わらず特殊な術式（詠唱を伴い魔力波等ではなく現象として発動する）を行使できる点が挙げられるらしい。らしいというのは特殊なものしか相手したことがないからだ。

そうなんだよなあ、恭也さん術式展開五倍速で魔力量が五十倍って張り合える気がしない。後数年すれば張り合えなくはないとは思うが、魔力が足りない。今は勝てないな。

『とはいえあそこまでの剣撃は評価できますね。体重、年齢を考慮すれば十二分に及第点といえます。』

「ありがとうシャル。」 今はまだ弱いことはわかっている。だから頑張れば強くなっていける。そう考えて練習を終えた。

『助けてください。』

念話が聞こえてきた。まあ、無視してギャルゲを続けよう。

『ブルアアアブルアアア』

電話か……携帯から若本の雄叫びが聞こえる。ディスプレイを

確認する。

「恭也さん？」

不思議に思いながらも電話をとる。

「ああ、もしもし？」

『刀夜か？少し頼みがあるんだが……なのはが念話の家から飛び出した。念話のすぐ後だから、多分それに関係あるんだろう。』

「わかりました。現在位置は？」

俺はギャルゲを停止して、席を立った。

「何だあ、あの魔力は？」

恭也さんと合流しようとして道を進むとかなりの魔力の奔流を感じ取る。恭也さん並の魔力はあるな？なのはか？

現場に着くと、改造制服のようなものを着たなのはが、魔法少女が持つには少しメカっぽい杖を持って、影を実体化して作られた十字架に張り付けられた化け物を封印していた。

これが後にPT事件と呼ばれ新たな伝説の始まりになるとは考えなかったが。何かが変わる、そんな気がした。

ってか改造制服風ってwww

## 第一話 無印開始（後書き）

まずははやてと恭也がキャラクター崩壊しました。

主人公は転生者でも最強でもありませんwwwまだ……

恭也の魔力量はAA。刀夜はCです。

更新は一日おきの午前三時の予定です。

次は29日にノシ

## 第二話 戦略会議（前書き）

少し短いかもしれませんがどうぞ。  
少しキャラ崩壊してるかも。

## 第二話 戦略会議

「さてと、どういうことか説明してもらおうか。」

土郎さんは食卓の普段なのはの席の前の小動物に問いかけた。ちなみに俺は恭也さんと美由紀さんの席の間に立っている。

「はい……」

ユーノは説明した。

「……要約すれば、次元干渉を引き起こしうる願望器ロストロギア・ジエムシード、それも願いを歪んだ形でかなえるもの。そのかけら21個が事故により海鳴市に落ちてきた。それを発掘し、運搬してきた君が公的機関に頼らずに独自回収しようとしたけど、失敗。その後なのはに拾われ、今に至るといふことかい？」

土郎はどこか呆れながらもユーノに問いかけた。

「はい。」

「てめえ、馬鹿か！？地球の公的機関に頼らなかったことと、責任を取ろうとした点は誉めてやるけど、次元管理局に応援を頼むとか傭兵を雇うとか自分以上の力を持つものに頼ることは考えなかったのか？」

地球の公的機関としてはこの類のことは、聖堂教会か、魔術教会、さらにはアトラス院と言うところか。

聖堂教会の場合は次元世界、他世界からの干渉に関してはかなり厳しい。一応そついう類のことに対応する手段はあるだろうが、多分破壊する方向で話が進むだろう。

魔術協会の場合は、回収するだろうが、人材や用具デバイスを奪われた上にジエムシードを持って行くだろうな。情報隠匿のため口封じされそうだし。

アトラス院ならデバイスに関する技術提供で協力するだろうが、日本における影響力が足りないから依頼できないだろう。

「うちの一族は発掘調査を主にした種族で傭兵を雇うような余力は

ありません。実力的に僕が一番ましつてくらいです。管理局には通報はしましたが、正式なロストログア指定を受けていないジエムシードの捜査に回せる人員はいないと一蹴されました。」

ユーノは打ちひしがれていた。なんかorz状態だし。さすがに話せるだけあり、芸達者なようだ。だができることはしつかりやったみたいだ。

「さすがにかわいそうだよ。そんな強く言わない方がいいと思うよ。」

「そうなの」

美由紀さんとなのはがユーノをかばう。ほかのみんなも同じ意見のようだ。

「わりい。言い過ぎた。」

「大丈夫。気にしてないから。」

のほほんと返事が返ってきた。何というか器が大きいな。

「さてと、事情はあらかたわかったから、これからのことを話し合おう。」

土郎さんが微笑みを下げて真剣な表情になった。

「なら、俺はTTS（月村総合警備保障）のサイドとして意見させてもらうぞ。」

「どうしてなんも関係がないみんなが手伝っていただけなのですか？」

ユーノが驚いて聞き返してきた。

「ごうやって事情をなしてもらった以上、何らかの対応をしないといけないからね。」歪んだ願望器なんてものを放置していたら危険だ。なにが起こるかわかったものではないな。」 恭也さんと共に対応の必要性をいった。

「ユーノ君も困ってるんでしょ？だったら、私も助けたい。私にできることがあるなら。」

なのはも同意した。

「すみません……」

「ユーノ君ここはすみませんじゃなくて、ありがとうだよ。」

なのはは軽くむくれながら告げた。

「そうだね。ありがとうございます。」

「感謝するにはまだ早いぞ。これから身の振り方が決まるんだからね」

士郎さんは告げた。

「ジエムシードは基本的に封印でいいのかい？」

「はい。封印作業はレイジングハートを使えば可能です。」

「デイルロス、シャルは封印作業出来るか？」

俺は自身のデバイスを確認をとった。

『すみません。戦闘、攻撃に特化して作られたので』

『ハロルドかクレメンテならできたのであろうが。』

「そうか、ならなのはに頼むしかないのか。」

「なのは、お願いできるかい？」

「うんなのは頑張る。」

「よし、よく言った。」

士郎さんがなのはの頭をなでる。やっぱり親子っていいな。

「なら、俺はなのはの護衛ってことで受注っていうところかな？報酬はレイジングハートのデータでつりがくると思う。」

「そうか、なら忍に話しておこう。それでいいか？ユーノ？」

「……その前に質問していいですか？」

ユーノが真剣な眼差しでこちらを見つめていた。

「なんだい？ユーノ君」

微笑みながら士郎さんは告げた。

「あなた達は何者ですか？この世界は魔法といった文明がないはずです。過去の歴史や物語といった作品内のもの、現実にはないものとされています。なのにお三方はさも当然のように魔法に関する話をされていますね。」

さすがにハイペースで話を続けていたが、聞かれるか……タイ

ミング的にも丁度いいな。なかなか空気を読める。

「確かにこの世界には魔法に類する技術はある。ただし、その神秘は秘匿され知ったものの口は封じられる。魔術と呼ばれるもので、それを研究し、行使するものが魔術師。魔術師は基本的に表にはでない。また、知られていないことで、神秘の純度は上がる。だから、教えることは親しい人だけ。知られたら隠匿のため命を奪うという例も少なくはない。」

恭也さんが告げて、

「んで、俺はそういう神秘が関わる問題が起きたとき武力介入し、解決する傭兵のような者だ。土郎さんは元だがな。」

苦笑しながら告げる。

「えっと……刀夜くんって私と同年だよな？」

「ああ、うちは万年人材不足でね。六歳から働かせられてるよ。」

まあ、そのおかげで生活費には困らないし、海鳴市にいられるんだがな。

なのはとユーノは驚愕の表情を浮かべていた。

「俺のことはおいといて、ほかに質問は？」

「二人がお持ちのアームドデバイスは何ですか？ベルカのものともいろいろ違うようですが……」

「ああ、ソーディアンか。これに関しては社長から渡されたロストロギアに分類される特殊なデバイスとしか答えられないな。地球以外の世界から持ってきたらしいけど……」

頭をかきながら答えた。実際うちの社長は色々超越している。

転移で異世界にいけるらしいが、なんかこの前アルハザードに行ってきたとか言ってたしなあ。この二本だってある世界の英雄から譲り受けた古代の剣らしいし。

「ああ、あとはこいつら自体がリンカーンコア的なものを持って、魔力が全然無い俺でも扱えるし、変換資質はこいつら自体のものをつかう。」

「リンカーンコアってなに？」

「なのは、リンカーンコアっていうのは、魔法を使う魔力を生み出す器官のようなものなんだ。まだ、そのような技術は確立してないらしいけど、ロストログアだったらあり得るね。」

なのはにユーノが解説した。

「ちなみに俺はなのはの五十分の1ぐらいの魔力しかないから。」  
「少ないね。」

「そうだけど、なのはの魔力量が多いだけだから」

一般武装局員より少ないけどね俺の魔力。

「質問は終わりかな？」

二人をみた。うん、

「無いようだったら、レイジングハートのデータをとらせてもらっていいかな？なあに、データを取るといつても明日の午前中、なのはが学校に行ってる間にとっちゃまうるさ。」

「……それに同席してもいいですか？」

「勿論。むしろ来てもらわないと困る。」

「ならその方向でお願いします。」

一通りの結論がでたから解散だな。

「んじゃ、ユーノこっちで預かって行きますね。」

「ええ、ユーノ君連れてっちゃおうの！」

美由紀さんが反論してきた。

「理由は？」

「飼いたい。」

いや、その気持ち解らなくはないけどねえ。なんかユーノも苦笑いしてるし。

「どうする？ユーノ」

まあ、本人の意思を尊重しよう。どちらも受け入れる分に問題なさそうだからな。

「それじゃあ、なのはのところ」「了解。それじゃあまた明日。」

ユーノを机において俺は帰宅した。

## 第二話 戦略会議（後書き）

刀夜としてはユーノをペットの的な扱いにしてはやての無聊をどうにかできないかなと考えてました。

ちなみに、ソーディアンはベルカ式をベースに作られたデバイスです。アームドデバイスです。バリアジャケットなんて便利なものは使えません。

このような駄文を読んでいただいたことに感謝をノシ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7077x/>

---

魔砲少女リリカルなのは Gear of Night

2011年10月29日04時18分発行